



普賢菩薩 (騎象像)

# 日々好日

六七一号

(令和七年一月発行)

今年の干支は乙巳(キノトミ)で、いうところのへび年ということ、昭和16年生まれの私は年男ということになります。

へびは特別の方を除いて毛嫌いされる方が多い。私もその一人ですが、岩国には白へびが棲息し飼育され観光客誘致に一役曾っています。白い蛇身に赤い目、なんとも魅惑的で他のへびと印象が違います。お金に不自由ないとされ立派な白蛇神社も建てられ信仰もされています。お金は無いより有るほうがいいですが、国会で103万円の壁が与野党で議論されていますが、税金を減らし収入を少しでも多くしたいというのは物価高が続くおり、他人事ではありませんが、これも平和なればこのことでしょうか。

ウクライナや中東ガザでこんなことが議論されているとは思えません。世界の国々の中で発展途上国などの国民や戦争に明け暮れている国の人々は生きること汲々としています。そこで思います

- Ⓐ 平和なれば
- Ⓑ 貧乏でも構わない

こんな他愛もないことを新年初頭の祈りとしたい。このような意識改革をそろそろ考えてもいい時期に来ているのではないでしょうか。

## 弘法大師のお言葉 (高野雑筆集巻下)

「国中の災祥はもとよりこれ衆生の善悪の感づるに由るなり。善悪を修するときは則ち風雨節に順い、悪多き時は則ち五穀登(みの)らず。教えの中に明誠あり」



日々好日

高野雑筆





入院患者でこのようなことを為す者は他に一人もいないというのです。

こうしたわずかな入院生活の日々にも生者必滅の世界の現実を目にします。

その中でも三笠宮妃百合子さまが101才で亡くなられたのはじめ、詩人の谷川俊太郎氏が92才で、元横綱の北の富士が82才で、そして冒頭にあげた火野正平さんが75才で亡くなられました。

中でも三笠宮妃殿下は長寿を全うされ一番お幸せであったと思われがちですが、五人のお子様のうち三人の男のお子様は60代、50代で先立たれています。悲憤は察するに余りあります。

人はそれぞれが主役としての人生を演じ続けて生きてきたのですが、その胸の内は伺い知ることができません。その多くが悲しみと後悔の念に満ちていることを知らなければならぬということなのです。

私は22才の時、東京の三笠宮邸を訪れています。勿論、それは師僧（草繫全弘高野山三宝院主）の鞆持ちとしてのことですが…。

高野山高校に体育館が竣工しその式典に三笠宮さまが出席され校長であられた草繫師の自坊三寶院に宿泊されたという。それ以来毎年御挨拶に三笠宮邸に足を運ばれていたのです。



ていたのです。

その時に揮毫されたという「味」字の複製の額が先代の時から当山にあります。父が草繫師より拝受したものです。

通常の和とは偏と旁が逆で、稔りを人々が口々に喜んでしている文字だと

いう。漢和辞典にも当然のことながら口偏で出ています。

私自身の人生の終焉はまだ少し先のようなですが、誰もが与えられた人生を精一杯生き、それぞれの業績を遺して此の土を辞すのだということをわずかな入院生活の中で改めて認識させられたことでした。

届けられた新聞に目を通せば「80・50」と題する記事が目にとまりました。それは80才代の親を50才代の子が見守り、十年後には90才代の親を60才代の子が支える。その時には親の内一人は亡くなり、一人暮らしはできなくなり介護を考えざるを得ないこととなり、大変な時代が到来するとありました。身に染みる記事である。更に目を移せば葬送のことが目に付きました。コロナ禍以来葬儀は家族葬化してきていますし、高齢化もすすんで墓仕舞いもあり、遺骨の行方も千差万別になっています。

今日、樹木葬なるものが現代人に受け入れられているようですが、これは骨壺に遺灰を入れそのかたわらに樹木を植えるというのですが、それはまやかしであると受け止められる記事がありました。

樹木を育てるなら遺灰を壺に入れたのでは樹木との関りはないに等しい。これからは地球環境を調える意味で、樹木を植える、それも遺体を火葬せずに土葬してその上に木を植えるというもので、樹木葬ならぬ堆肥葬なるものである。木の葉や廃棄された食べ物が堆肥となるように遺体を堆肥となすというものである。これからは人間堆肥葬なるものが行われるようになって欲しいというものでしたが、散骨して海を汚すよりは良いようにもおもいますが、堆肥葬は現代人に受け入れられるのであろうかと疑問に思うのは私だけでしょうか。

それと相前後してNHKで様々な埋葬を紹介する番組

があり、深海葬なるものを知りました。それは水深二五〇〇メートルという駿河湾の海底に砂岩で作った壺に遺灰を納めて沈めるといふもので、経費は百万円だといふ。壺はすぐに溶けて海底の土となるといふ。その点では散骨よりは良いように思うも経費は妥当なのかを考えないわけにはまいりません。それは遺骨の処分のみで、以後の供養が伴わないことである。

こうした葬送をことさらに選んで視聴し、読んだわけではありませんが、僧侶なるがゆえに目にとまり耳に入つたのでしよう。

入浴の代わりに熱い不織のタオルが配られ身体をふくことが何度かありましたが、点滴がなくなりシャワーが可能となり、さっぱりすることができました。そこで気になつたのは伸びに伸びた頭髪である。看護師に頭髪を剃っても良いか尋ねると、可能だといふ。毛髪は流さないで下さいといふ注意事項はありましたが、これは先刻承知のものでした。

常日頃は四日か五日毎に剃っていましたから、二十分もあれば十分でしたが、十六日間も伸びた髪は容易には剃れません。通常の倍以上の時間をかけて終りましたが、後始末もして部屋に戻ると看護師に剃り残しを指摘されたこともありました。剃りたての頭は話題の種ともなつていたようでした。担当医にもリハビリ師にも即日、誉め言葉をいただきました。これは退院の日も近いのではないかと感じた日のことでした。

また、種子島でのロケット打ち上げが失敗したことを報じるテレビで、ある大学教授が、人間が地球以外に住める可能性のある星は月と火星でそれ以外にはない。

そしてそれは富裕層の人の為すことである。それには

絶体反対である。それは貴重な資源を使い地球環境を破壊するからだといふ。

その教授は他の星に移住を考える者は、少なくとも10年かけて植樹して地球環境の改善を図つてからにせよ。というような趣旨の発言が印象に残つたことでした。地球温暖化で災害が世界中で頻発していることを考えればその道の学者なればこそその発言であろう。

入院生活では時間が有り余るほどあります。人生全般とはいかないまでも通津の地へ移転してからの様々のことが思い起こされますし、この寺報という飛行船をいかにみごとに軟着陸させるかといふことを考えざるを得ない事態に遭遇していることを知るのでした。

始めあれば終わりがあつたといふのはものの道理ですが、飛行船の船長の年齢や体調を考えれば、低空飛行をして飛行距離には限りがあります。

しかし、実際の車の運転と違い檀信徒のご理解と船長の気力さえあれば飛行距離を延ばせるであろうとのかすかな望みもあります。

併せて印刷機が十年を経て修理部材が調達できないとの事態も重なつて思案は尽きないのでした。

昭和44年3月以来途切れることなく毎



(寺報、創刊号と百号毎の記念号)



凶鳥と蛇の恩返し

その昔、ある国に難と名付く国がありました。

その国の王は此の世は無常なる世界であることを悟って王宮を出て、出家して沙門となり、一鉢の食で足れりと山に入って修行に励んでいました。

その山に深い坑がありました。一人の獵師が獲物を追って山中に入りその坑に落ちたのです。

その坑の近くに鳥と蛇が居ましたが、獵師が落ちた時、引きずられるように一緒に落ちてしまいました。鳥と蛇は体を傷め苦しんで悲鳴をあげて助けを求めました。

助けを求める悲鳴を聞いて沙門がかけつけ、蔓草を垂らして獵師と鳥・蛇を救いました。

彼らは沙門にお礼を言いました。

「沙門よ、あなたの心優しさに万分の一のお礼をさせて下さい」と。

沙門は言いました。

「わたしは世の無常を知り国を捨てて沙門となったのです。ただ 仁慈を施しただけです」と。

獵師は言いました。

「我が家に来て供養を受けて下さい」と。

鳥もいいました。

「沙門よ、私の名。パトラです。難あれば名を呼んで下さい急ぎかけつけます」と。

蛇もまた言いました。

「吾が名はデラハなり。沙門よ、患あれば吾が名をよんで下さい。必ず来たりて恩に報いん」と。

後日、沙門は獵師の家に至り妻らと雑談をしている間に日中を過ぎ、沙門の例として食を受けることができま

せんでした。沙門はその足で山に入り鳥の名を呼びました。

鳥は言いました。「いまここに供養物なし。しばらく待つて下さい」と。

鳥は隣国に飛んで王宮に入り夫人の宝石箱の中から明月珠を加えて持ち帰り沙門に献じました。

夫人は明月珠が盗まれたことを王に告げました。王は明月珠を見付けた者には褒賞を与え、秘匿した者は重く罰すると勅しました。

そんなことは露知らず沙門はその明月珠を獵師に与えたのです。獵師はそれを王に献じました。

王はこれをどのようにして手にいれたかを問いました。獵師は沙門から貰ったと答えましたから、沙門は捕らえられて穴を掘って頭だけ出して埋められたのです。

沙門は蛇を呼びました。蛇は地中に埋められた沙門をみて涙して言いました。

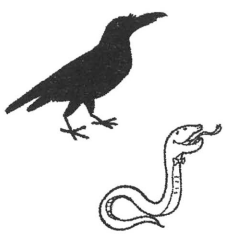
「吾に神樂あり、これを口にすれば死者も蘇生せん」と。その国のたつた一人の太子が蛇にかまれて落命したのです。火葬しなければと埋められた沙門のそばを通りかかりました。

沙門は言いました。「しばらく待て、太子を助くべし」と。

穴から出された沙門は蛇から預かっていた薬をもって太子を蘇生せしめたのです。王は大層喜んで沙門に国の半分を与えんとしましたが、沙門は受けることなく山に入り道を学び精進してやまなかつたという。

鳥と蛇はこうして沙門に恩返しをしたのである。

沙門は羅漢の悟りを得て命終して天に生じたという。(六度集経卷第五)



# あとがき

思いもよらず入院生活をしましたが、体調も回復してお寺で年末年始を過ごせるのは、み仏の冥護のたまものだと思えて信心をつのられています。

檀信徒の皆さま方も寒さが日毎につのるなかで、健康に留意されご家族揃ってお元気で良き新春をお迎え下さいますように。

今年は能登半島地震で明け、豪雨被害も各地でありました。住まう家屋を失っては生活がなりたちません。一日も早い復興を願う日々でした。

闇バイトなる悪事が横行し、SNSなる文明の機器を通じての犯罪はもとより公正が基本の選挙までもが著しくゆがめられた一年でした。

これは今年で終わるような事柄ではありませんので新しく迎える年が、希望に満ちた輝かしいものになるとは思えないのは、何んとも悔しく情けないことです。

それでも、一人一人の善なるものを信じ期待して、新年を迎えたい。

春には此処、通津に移転して十年の報恩の法要を営むことを予定しています。住職としての総仕上げの心つもりでいます。

この一年の厚誼、ご支援を深く感謝申し上げます。

発行者

高野山真言宗

宝池山 龍門寺

吉岡 光昭



騎象せる

普賢菩薩は

慈悲ふかし

日年を守る

頼れるほとけ



数珠手

岩国市通津 3634 番地 3

☎740-0044

高野山真言宗

寶池山 龍門寺 発行

岩国 (0827) 38-4611 番